



人 力 車

梶 原 重 道

幅三間はかりの道ではあつたが、その勾配の強さ、二三日降り積つた雪で車の上の彼にやむなく下りてもらはねばならなかつた車夫は、しきりに詫びを訴へながらトランク一つをのせてその車をひきあけていつた。

彼は再び車上の客となつた時、時計をこり出して

五時頃歸れる？　こつぶやきながら胸の中でもくうみを立て、了つた。

ぬけめなく聞きこんだ車夫は、彼の機嫌を損じないように、

壇那、今日お歸りですか、

待つてますから又歸りにや乗つてやつて下さい、

客の少ない此の寒さには之から驛で待つてましても壇那のお歸りをお迎えするより外はないでせうから。

ミ憐れみを乞ふように願つてゐる車夫の言葉に、彼は「はあ」ミ軽く答へたまゝ、そのこり違えた

車夫の言葉を別に訂正しようともせず、梢から落ちる雪の姿を眺めながら車に揺れてゐた。

壇那雪の力は、えらいもんですね、掘らうと思つてもなか／＼ツルバシのたゝない此の産も、凍りあがつて落ちますよ、

みなだれてくる雪と土とを目にしては彼の御機嫌を伺つてゐた。

今日のやうにいゝ、お天氣が續きましても此の雪は春迄は消えないんですよ、

こま／＼氣輕に話してゐる車夫の額には早汗がにじんでゐた。

壇那でここまでお出で、すかい？

こ喘ぎの息を押しきつて輕快に媚びをふくめた問ひを吐き出して額の汗をぬぐつた。

京都迄行くんです、

京都迄今日中に往復出来ない事を知つた車夫は、

五時に歸るこは京都の方へてすかい？

こ問ひ返した。

え、そうです、

こ無雜作に答へた彼の言葉が車夫の耳に流れ込んだきり車夫は一言も語らなくなつて了つた。報酬をのぞんでの豫想を裏切られた淋しさからだつたのであらう。

滑りがちな雪道を走つてゐた車夫の元氣も、それつきり鈍つたように彼には思はれた。

十丁ばかりミ云ふものは一言の話し聲もなく、雪にくひ入る車輪の音ミ、車夫の吐き出す喘ぐ息ミ時々崖から滑り落ちてくる凍りあがつた土くれの音、ミがより寒寂な雪道を淋しいものにさせた。

彼は此の氣まづい沈黙を忘れようとして時々

あゝ寒い、

ミ車夫にそれミなく訴へるように獨語したが、何の返事もなく只額の汗をぬぐつてゐる車夫の後姿をみるミ、殊更めいて吐き出した此の言葉により空虚な氣まづさを覺えるのだつた。

喘ぎ／＼黙々ミしてひいてゐる車夫の苦しさを推慮してゐる事は壇那である此の場合の彼にはしるびない事であつた。

こうして寒い辻でいつ來るかも知れない客を待つてゐる事は雲をつかむような事ですから、さうぞ乗つてやつて下さい、

ミ車夫の方から懇願したにせよ、そして金さへ支拂つてやればいゝんだ、ミ

只それだけの事で此の推慮を葬つて了ふ事はさうしても今の彼には出來なくなつてゐた。

雪道を歩く俺の冷たさ、トランク一つの重たさ、それが僅の金で車夫に買つてもらつたミ云へるのか、

車夫の額をつたつてゐるあの汗それが俺の汗でなくて誰の汗だ。

二十丁の雪道が僅か三十錢だ、而もその間車夫自らが俺に強いて乗せたのだ、その時車夫の懇願に

かなへてやつた事が車夫自らをぎんなにか喜ばせた事だらう。

然しその喜びは車夫自らの今の苦しみではないか、そして俺は乗りものにつて樂をしてゐるんだ。

一人を楽しませ一人を喜ばせるミ云ふ事は、やがて一人を苦しめ一人悲しませる事でなければならぬのか、ミ

そんな事を考へてゐる間に車は小さい驛の前で止つた。

こうした矛盾を知り初めた彼は遂にその悶えから逃れる爲に五十錢一枚を支拂つて了つた。

豫想外の金を得た車夫の顔は再び汗の中にほがらかに輝いた。

三十錢の車賃を過分に二十錢與へたミ云ふ事も、車夫の勞に對するねぎらひミ謝意ミの彼の心づくしである筈だつたにもかゝらず、過分を與へて車夫を喜ばせた高慢ミ、勝ち誇つたものゝ得意さが、早その時の彼の胸を占領してゐた。

矛盾を知り矛盾を退けながら矛盾の中に喜こんでゐる彼自らの姿が、待合のストーブのほてりに暖たゝめられてゐた。

人を喜ばせるミ云ふ事は如何に多くの偽善を働かねばならない事だらう、ミ淋して頬笑んだ彼の耳に發車信號のベルは冷たく鳴り響いた。